

生物科学学会連合 第5回定例会議 議事録

日 時：2012年10月5日（金）14:00～16:30
場 所：東京大学山上会館 2階 201・202 会議室

出席： 運営委員

浅島 誠（生科連2011-2012代表・国際生物学オリンピック日本委員会委員長）
長濱 嘉孝（生科連副代表） 福田 裕穂*（生科連副代表）
宮島 篤（生科連前代表） 入江 賢児（生科連前副代表）

学会代表（加盟学会）

吉田 丈人*（個体群生態学会・日本生態学会）
東原 和成*（日本味と匂学会） 岩崎 博史（日本遺伝学会）
大野 博司（日本細胞生物学会） 海老原 史樹文（日本時間生物学会）
福田 裕穂*（日本植物学会） 石田 健一郎（日本進化学会）
木山 博資（日本神経化学会） 和田 圭司（日本神経科学学会）
木下 タロウ（日本生化学会） 米澤 義彦（日本生物教育学会）
曾我部 正博（日本生物物理学会） 小西 真人（日本生理学会）
中村 春木（日本蛋白質科学会） 真行寺 千佳子（日本動物学会）
武田 洋幸（日本発生生物学会・国際生物科学連合理事）
安藤 規泰（日本比較生理生化学会） 山本 和俊（日本比較内分泌学会）
木暮 一啓（日本微生物生態学会） 石野 史敏（日本分子生物学会）
樗木 俊聡（日本免疫学会） 石井 邦雄（日本薬理学会）

（計23学会）

学会等代表（オブザーバー団体）

北里 洋（自然史学会連合）
西田 治文（日本学術会議自然史・古生物学分科会）
田谷 正仁（日本生物工学会） 東原 和成*（日本農芸化学会）
鶴崎 展巨（日本分類学会連合）

（計5団体）

欠 席：日本宇宙生物科学会 日本解剖学会 日本植物生理学会

（計3学会）

中西 秀彦 山口 恵子（事務局）

（敬称略、団体名五十音順）

議 長：浅島 誠
長濱 嘉孝（次期代表選出に係る議事のみ）

- ・本会議は「生物科学学会連合の運営規約」第3条により開催された定例会議である。会員出席数および欠席委任状の数の合計が総会員数の2/3以上となったため、同規約第10条により、本会議における満場一致の議決事項については本連合の議決事項として採用される。
- ・本会議は本連合設立時の第1回連絡会議より通算して第30回目の全体会議に相当する。

議題・報告：

- 1) 前回議事録の承認
前回議事録案が確認され、承認された。
- 2) 生物科学学会連合平成25・26年度代表の選考
推薦者は以下の3名であった。
 - ・浅島 誠 氏（日本宇宙生物科学会所属、日本宇宙生物科学会・日本生化学会より推薦）

- ・福田 裕穂 氏（日本植物学会所属、日本植物学会より推薦）
- ・堀田 凱樹 氏（日本遺伝学会所属、日本遺伝学会より推薦）

1 回目の投票を宮島氏・入江氏の立ち会いで開票の結果、浅島氏 16 票であり、代表選出議決細則 8 に基づき当選に必要な過半を超えているため、浅島氏が当選となった。

長濱議長より以後の選挙について以下の意見が述べられた。

- ・選挙管理委員会の設置等、より整備すべきである。
 - ・加盟学会から次期代表候補者の推薦を行う際には、情報量に大きな差異が出ないように推薦書の書式等を規定したほうが良いのではないかと。
- 今回の選挙までには整備を行うこととなった。

3) 生物科学学会連合平成 23 年度会計監査報告

事務局より平成 23 年度会計監査報告が行われた。石浦章一氏、松木則夫氏の監査が行われて正確妥当なものと認められたという報告があった。なお本件に関連して石浦氏より生科連の活動について外部からの資金を導入する等、資金繰りについて具体的な方法を検討すべきではないか、松木氏からは事務委託費の変更に伴い契約書の内容もそれに対応するよう整備すべきであるというコメントがあった。会計監査報告については、全員異議なく了承した。

4) 活動報告と今後の課題について

① 情報発信について

浅島代表より、学術会議の動向や法人化、ポスドク問題、科学研究費、IBO（国際生物学オリンピック日本委員会）、IUBS（国際生物学会連合）、国内外のライフサイエンス関係の情報、学会活動の情報等を年 2 回の定例会議での口頭報告だけではなく、ニュースレターのかたちで随時発行するという提案がなされた。ただし情報については個人ではなく学会もしくは公的機関からに限るものとする。これに対し、ニュースレターの記事文章をメールで配信されるより、生科連のホームページに記事を掲載するなどしてそのリンク先一覧をまとめた簡潔なホームページ更新報告をメール配信されるほうが、各学会としては周知協力しやすいという意見があったので、そのように運用することとなった。

② 学会情報の集約と発信

法人化に対する各学会の対応状況や、大会・シンポジウム情報などは、生科連事務局では各学会から連絡のない限り把握することができず、またそれを学会間で共有することもできない。こうした現状をあらため、情報集約と発信力を強化することが改めて浅島代表より課題として提示された。事務局に連絡があれば、ホームページに載せる対応とすることが確認された。

③ 生科連への連合体の入会について

2 つの連合体について定例会議へのオブザーバー参加が承認された。北里氏より自然史学会連合、鶴崎氏より日本分類学会連合の紹介がなされた。それをうけて浅島代表から以下の発言があった。加盟学会数の増加は、本連合の学術的基盤や財政基盤を固め活動を活発化させる上で必要不可欠であり、また研究者の要望や意見を表明するにあたっては連合体としてはたらきかけることが有効であるという認識は一致している。すでに生物科学学会連合以外でも連合体を組織しているところがあり、これらとも連携すべきである。

これらの連合体すべてが一緒になると地球惑星科学連合以上の規模となる。地球惑星科学連合は学術発信力においても非常に大きな力をもつようになっているが、生物学領域では各学会による学術発信力における分散した要望がおこなわれ、力が発揮できない。将来的にはたとえば生物学会（仮称）というものに収斂し、ゆるやかな連合体という形で互いに協力をすすめていきたい。いわゆるアンブレラ方式を考えてみた

いが、これは皆様方と相談しながら進めたい。その先にあるのは生物学の振興をはかりたいことである。連合体の場合の会費のあり方などは今後検討課題であるが、みなさまのご協力をいただきたい。

この発言に対し以下の意見があった。

・みなが同じ方向を向くのは難しい。それぞれの立場を維持しながら二重構造的に参加できればまとまりやすのではないか。

・一つにまとまっていくという方向は重要だと認識しているが、具体的な手順については議論があることと思う。慎重にすすめていただきたい。

これに対し世界の情勢や学会の情勢を検討しながら、各学会の合意を尊重してすすめたいとの発言が浅島代表よりなされた。

④ 生科連への学会の加盟状況

浅島代表より、生科連から入会を勧誘することになった 8 学会について進捗の報告がなされた。日本実験動物学会からは入会申請を受けることができた。また入会検討中として日本農芸化学会・日本生物工学会がオブザーバー参加している他、日本海洋学会・日本昆虫学会は引き続き入会検討中である。

⑤ 日本からのジャーナル発信力の強化

浅島代表から現状の報告と今後の生科連の方針についての提案がなされた。

科研費が冊子体からオープンアクセスのオンラインジャーナルを優先するようになった。この中で医学系では領域の統合が進展し始めている。また物理では理論物理の PTP を廃刊とし、物理学会でまとまってだすという方向になっている。生物関連でもまとまることにより、専任の編集者などを雇えば、各研究者の負担は減る。日本のプラットフォームでは J-STAGE3 がある。なかなか国際化対応ができていかなかったが、1000 誌が集まっており、XML により世界標準となるなど、今後の発展が期待されている。常に進化するプラットフォームにして欲しい。

加盟学会より、国際化の時代になぜ日本からの発信が必要なのかという発言があった。浅島代表はこれに対し以下を答えた。メガ出版社のパッケージが高騰して買いにくくなっている。小さい大学では買えないところが多くなっている。日本からの発信ならそれに対応できる可能性がある。また、レビューを海外にだすことでアイデアが剽窃されるというようなことがある。また若い研究者に編集やレビューを経験させることも教育上重要である。

これに対し加盟学会より、小さい学会では雑誌を持つことも難しいという現状について述べられ、生物系の各学会が一つの組織としてまとまるのは現実的になかなか難しいが、雑誌レベルで統合できることには非常に意味があり、小さなものが数多くできてしまうよりもよいのではないかという意見があった。

⑥ 自然史標本の保護と自然史博物館について

例えば文化財には国宝・重文等の評価基準があるが、貴重な生物の標本に関しては学術会議でも分科会ごとに単独で議論されている状況。大きな流れの中で議論してまとめ、今後の流れを打ち出したいと浅島代表より述べられた。

長濱副代表からこれをうけて以下の発言があった。文化財は国から厚い保護を受け、保護の方法が確立しているが、自然史標本についてははっきりした方法がないということが、大震災をきっかけに明確になった。自然史標本の文化財化を考えている。

日本学術会議自然史・古生物学分科会・西田氏より、自然史の標本を保護するために独自のシステムを作り、自然史博物館を活用するという方向で話が進んでいるという補足説明があり、生科連ならびに加盟学会にも協力をお願いしたいという発言がなされた。

⑦ ポスドク問題、博士課程進学者減少の問題について

浅島代表より現状の報告がなされた。文科省で問題が報告され、内閣府でも若年層の

育成という問題がとりあげられた。「5年次雇い止め」が検討され、若年層育成の検討をはじめたので、研究の場の確保と共に考えていただきたい。今後もこの問題に協力していくが、この問題は大学の雇用力の問題と直結している。

6) 規約の変更について

今回の議題に関連して、規約の改定の提案が浅島代表よりなされた。変更点は以下の通り。

- ・運営費（会費）を3万円から5万円に変更する。
- ・連合体も生科連の会員として加盟できることとする。当面は学会と連合体の運営費（会費）や会員資格等は同一とする。会員として在籍する学会の含まれる連合体が会員となる場合には、それぞれ別個の一団体として扱う。
- ・会計監査報告の時期を、次年度最初の定例会議から、次年度中の定例会議に変更する。

本件に関連して、オブザーバー参加している連合体から、入会を検討するに際しての疑問点や問題点の指摘があった。

- ・重複して加入している学会をどう考えるか。
- ・連合体がどのような立ち位置となり、機能をどうするか、議論して行かなくてはならない。究極的には連合体の中で生科連加盟学会と重複していない学会が生科連に加盟し大同団結してひとつの連合となるというのが最終形態として考えうるが、そこまでいたるには何らかのステップを要するのではないか。
- ・連合体の生科連運営費（会費）が高額の設定となると、既に連合体のほうでも加盟団体から会費を徴収していることもあり、現実問題として入会が難しい。

規約の改定についてはひとまず原案通り承認された。浅島代表から、連合体参加については今後、位置付け等について皆さんと一緒に検討を続けたい旨発言があった。

7) 平成 25 年度予算案について

平成 25 年度予算案について承認された。また、今後連合体が生科連会員となる場合の位置付けや運営費（会費）の設定とその根拠の明示について加盟学会より要請があり、検討することとなった。

なお、今後定例会議への参加人数が増えると、従来定例会議を開催していた東京大学山上会館会議室では開催不能になるため、経費の節減も兼ねて次回からは福田氏に東京大学学内の別会場の手配を依頼することとなった。

8) 次期会計監査委員について

現任の松木則夫氏と石浦章一氏に再任を依頼することが承認された。

9) 日本実験動物学会の加盟について

全員異議なく了承した。

10) その他

①IUBS（国際生物学会連合）について

武田氏より近況の報告がなされた。7月に蘇州で開催された 31st General Assembly で Nils Chr. Stenseth 氏（ノルウェー）が会長、武田氏が幹事長に選出された。日本からは6つの提案があったが「災害と生物多様性」が採択された。

②IBO・JBO（国際生物学オリンピック）について

浅島代表より近況の報告がなされた。今年はシンガポールであり4名が銀メダルを獲得した。3100名余りの受験があった。文科省では科学オリンピックを重要なものと認識している。来年はスイス。再来年はインドネシアとなる。

問題作成について加盟学会からも多大な協力を受けたことに対し謝辞が述べられた。

③学術情報 XML 推進協議会について

協議会関係者から以下の発言があった。XMLの学術情報発信が海外に頼らざるをえなかったことをあらためたい。また漢字情報のXML化に寄与する活動を行い、日本からの発信を推進したい。

④高等学校の生物の学習指導要領の変更

日本生物教育学会から、高校の生物教育状況について情報が寄せられた。新しい高校生物は教育現場で教えることの難しい内容になってしまっている。また高校生物教科書の検定が緩くなり、教育現場で使用されている生物の教科書が非常に多様になっているが、生物教育用語の統一がなされていない。

これに対し、教育内容の中で特に大きく変わった部分である分子生物学について、日本分子生物学会では学会として対応することを決めており、高校側からの問い合わせを受ければ学会としては対応しやすいので、専門の研究者が相談に乗ることのできる場所があることを現場の先生方にお伝えしてほしいとの発言があった。

用語統一の問題については、用語集の作成費用を文科省などから出してもらうことはできないだろうかという意見があった。

以上